神保美佳のメモ★ランダム――VOL.36

隣の男性が私の記事をじっと

MEMO★RANDOM

じんぼう・みか
法政大学卒業後、文具メーカー勤務を経て業界誌記者となり、1993年独立。
取材記事、コラムなど連載。近著「パチンコ年代記」（バジリコ、07年）

私は自分のことを「パチンコライター」とか「フリーライター」などと名乗っていますが、当初は全くこのような仕事をするとは思っていませんでした。そもそも、私がパチンコを打ち始めた80年代は、まだホールの女性客といえばお年寄りか水商売の人がほとんど。自分自身も「パチンコが好き」であると友達や家族などに言うことすら、非常に恥ずかしく思っていたものです。

その状況が変わって来たのは、大学を出て会社勤めをしていた頃、パチンコの専門誌がどんどん発刊されるようになってからでした。元々、取材をしたり文章を書くのも好きだったので、そういった媒体を見ながらうっすらと「パチンコに関する記事を書いて暮らしていけたらいいなぁ」などと考えるようになり、当コラムでも以前書いた通り雑誌の投稿が縁で、遊技業界誌の記者を経て何とか独立することができたのです。まぁいわば、趣味が仕事になったわけですから、ラッキーだったといえます。

ライターになってからは、それまで「こんな記事を書きたい」とか「こういう企画をやってみたい」と思っていた案などを、色々実現することができました。業界自体にもカード導入、CR機、液晶表示、タイアップ…といったように、エポックメイキングな出来事が次々起こり、毎日のように新鮮で興味深いニュースが耳に入って来たように思います。

…と、ここまで非常にライター生活が充実していたかのようなことを書いていますが、その一方で「趣味＝実益」の限界のようなものも感じていました。何というか、あまりにもパチンコのことばかり追いかけていて、いつしか作業そのものがルーチンワークになってしまっているのではないか…という悩みがあったのです。そこで、私自身の経歴である「業界誌記者から専門誌ライター」というのを生かして、業界ニュースと機種の情報に加え、一般的なサブカルチャーをミックスさせたような記事を作成することを思いつきました。例えば「業界のイメージガールの歴史」といったような、他の人にはなかなか手がけられない企画で、自分も読者もさらにパチンコが楽しめるように心がけてみたのです。

そうした記事は、専門誌だけでなく一般のスポーツ紙などでも書かせて頂いていますが、先日偶然隣にいた男性が私のコーナーをジーッと読んでいるところに出くわし、久々に軽い興奮を覚えました。ドキドキしながら心の中で「私、私、その記事書いたの、私です！」と、まるで「オレオレ詐欺」のように連呼してしまったりして（笑）、何だかお恥ずかしい。しかし、誰かが自分の記事を読んで楽しんでいてくれるのを実感することも、この仕事の醍醐味なのは間違いありません。

これからも、ルーチンワークを打破しながらそうした醍醐味を味わうことができれば…と思っています。